

コンブに関する

日ソ専門家会議に寄せて

増殖部 川嶋 昭 一

一 はじめに

昨年九月二十二日から二十四日まで三日間、貝殻島周辺のコンブ漁業に関する日ソ両国の専門家会議が、同海域のソ連船アフリナ号上で開催されました。このことについては当時、新聞やテレビなどでくわしく報道されましたので、その様子についてはすでに知っている人も多いと思います。この会議は昨年の六月モスクワにおいて採取協定の延長に関する交渉の際、ソ連側から貝殻島区域のコンブ資源が低下の傾向にあるとの指摘があつたため、日本側も一応これに反論しましたが、双方ともこの問題は双方の学者、専門家が会合して意見の交換を行ない、見解の一致をはかる必要があることを認め、開催にこぎつけたものです。この会議の出席者はソ連側から

じて考えていかなければいけない今後の問題について少しく述べてみたいと思います。

二 コンブ資源について

ソ連側から貝殻島コンブ協定成立以後の統計資料から操業区域内の資源が下向きの傾向にあるという説明がありました。これに対し日本側は貝殻島の漁獲高は全く歯舞地先の漁獲と平行して変動し、また根室、釧路支庁管内全体の変動ともかなり共通した点がある。また北海道の各地域の長年にわたる変動傾向と、その原因についての研究の現状を紹介し、特に道東においては流水や、いろいろな自然環境要因に左右されるもので、採取そのものだけを減少の原因と考えることに誤解がある点を強調しました。実際ソ連側の主張とは反対に、四十六年度の貝殻島周辺の漁獲高は八月十五日現在ですでに八七〇トンに達し、これは四十五年度実績の二倍近くに達する増産となつています。また四十六年のナガコンブ地帯は前年春の流水被害によつて全般的に豊作型となつていることを伝えました。

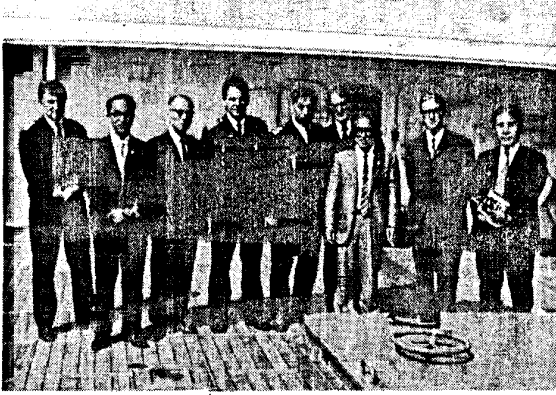
長スマンチエル氏のほか団員としてゾロタリヨフ、イルチユゴ、ハンおよびイリンの各氏（このうちコンブの研究者はイルチユゴ氏のみ）、また日本側は团长森沢大日本水産会専務のほか科学者として長谷川北水研所長、川嶋、佐々木（釧路水試）の三名、および川根根室漁協組合長、武部歯舞漁協専務、山田道水産会専務、中村大水国際部次長、油橋氏（大水囑託）が参加した。このうち二十三、四日の二日間にわたる討議には長谷川所長が代表となり川嶋、佐々木、中村、油橋の五名が出席しました。会議は終始なごやかなふんい気の中で行なわれましたが、前記のような趣旨から討議の内容は純粋なコンブ研究上の問題すなわちコンブの生活、資源および増殖を中心としたものに限られ、操業や規制区域の問題などは論議されませんでした。

以下に二日間の討議の結果と、それらを通

三 一年コンブの採取について

ソ連側は四十五年度の操業において、一年コンブがかなりの量混獲されたのではないかと臨検時の事例をあげ、これが資源に悪影響を与えていると説明しました。

これに対し日本側は、実際の操業においては、多少の一年コンブが間違つて採取されることはないと言ひ切れないが、研究の結果



日ソ会議メンバー アフアリナ号上にて 長谷川团长写

では一年コンブと二年コンブは漁場内では明らかにすみ分けがみられ、混生しないのが普通であるため、一年コンブが大量に混獲される可能性はきわめて少ない。また仮りに二年コンブと同じ株になつている一年コンブがあつても、これは秋から冬にかけて二年コンブの根がゆるみ流失する時に、同時に流失する運命にあることを説明し、住みわけ現象についてはソ連側の研究者イルチユゴ氏もこれに同意しました。さらに大切なことは、日本の漁業者も加工業者もいわゆる水コンブと呼ばれる一年コンブは利用価値が全くないことを充分に知つており、漁業者自らがこのような若いコンブの採取を嚴重に注意していること、およびナガコンブの採取は主としてカギ竿が用いられ、特に貝殻島周辺のサオ前漁業はカギ竿のみ使用され、コンブを船べりまですくい上げて、目で実入りを確かめながら、二年コンブだけを選んで採取し、一年コンブは海に返してやると言ひきわめて合理的な漁法を伝統的に用いている。これは日本のコンブ漁業者の生活の中から自然に生まれた資源愛護の知恵であることをくわしく説明しました。

四 雑藻、特にチガイソ類 駆除について

コンブ漁場内における雑藻の着生がコンブの新たな着生をさまたげ、資源の減少をまねくことについて、日ソ両方で深い関心を持つていることが話題となりました。その中で特にコンブ漁場に侵入している大型海藻のチガイソ類について、ソ連側から駆除すべきであるという提案が出されました。これはアイヌワカメやサルメンなども言われるコンブの仲間で、最近歯舞地先でも、コンブに混つてあがつてくる量が多くなつたと言ひ声を聞くようになりましたので、何とかしてこれを駆除する対策をたてなければならぬと考へていた矢先のことでした。会議の席上ではこれについて、コンブ漁場の保護のためには日本側としても磯掃除の必要性を感じておりながら、日ソの採取協定に定められている「昆布」という範囲にはチガイソ類が含まれるとは考へていなかったために採取していなかったこと、ソ連側からの磯掃除の提案について、現地漁業者の中にも、若しそれが許され、適当な方法さえあればそのために努力をすることはおしまないという考へがあることを述べ



會議風景

ました。またその具体的な方法について、日本側の経験が話されましたが、現状ではコンブと同じ漁具を利用するしか方法がなく、時期から見ると五月末までに行なうことが効果的であるけれども、現在の協定の中では実行は困難なため、この問題について日本側としても更に具体的な技術の検討を行なつて、次回の会議が若し開かれるならば、その時に改めて協議することになりました。

五 今後の課題

会議の最後にソ連側のスマンチエル団長は若し協定が来年も延長されるならば次のモスクワ交渉ではコンブの資源問題を討議したい。ソ連の専門家もこの資源の具体的研究に力を入れていと述べておりました。私たちは残念なことに直接貝殻島周辺の漁場に出かけて行つて、調査をすることは許されていませんので、コンブ資源の動向をはじめ、雑藻駆除の方法などは、どうしても歯舞地先などの本島側で行なうほかはありません。十分な対策と調査研究の努力が続けられるならば、おそらくソ連側と話し合い、理解し合うための良い資料が得られることは疑いませんが、科学者の立場としては、第一に「学問に国境なし」と言うことわざを一日も早く現実のものとしてみたいと希望をせずにはいられません。日本の専門家が一緒にコンブの調査に従事することができれば、資源問題はもちろん、科学的な操業方法についても、今年のようにお互いに別々の資料を持ち寄るより、もつと納得のいく話し合いができるものと信じます。

次に考えることは、ナガコンブ地帯の今後の増殖の課題についてです。根室、釧路地方

は何といつてもコンブの大生産地帯です。ナガコンブはマコンブ、リシリコンブのような良質コンブではないから、むやみに増殖する必要はないと言う声を聞かされることもあり。しかし現実の問題として、若しナガコンブの生産が今の二分の一に減つたとしたら日本のコンブ業界はおそらく大きさを維持するにちがひありません。どのコンブも増産が計られてこそ正常な姿が維持されるものであつて、そのためにはナガコンブの増殖手段につ



貝殻島産サオマエコンブの水揚げ

プに関する課題はいろいろな意味でまがり角

に來ていることを痛感します。

いても、更に研究と具体的な対策が必要でしょう。私たちは各地先で今まで十年間にわたつてコンブの生活を通じて増殖手段を考える調査を行なつてきました。しかし考えて見ると、この広い、地形や潮の流れのさまざまな漁場の中で、一体どのような場所に、どのような品質のナガコンブがどれくらい生えているのか、さらにアツバコンブやネコアシコンブ、オニコンブ、その他の雑藻との関係はどうなつているのかという具体的な資料が何一つ得られていないのが現状です。コンブ一本の生活、ブロック一個の着生量の研究から、もつと広い漁場の中の生活と、資源の様子を研究する方向に力を注いでいくことがこれからの課題だと思います。これはどこの地方でも大切な事ですが、特に道東のようにダイナミックなコンブ漁場地帯では、これからの増殖対策を考える上で必要な仕事だと思います。

今回の貝殻島のコンブに関する会議でソ連側の研究者イルチユゴ氏からも同島周辺のコンブ生育状況の調査について説明がされましたが、ソ連側でもこのような調査を各地で行なつていくことを考えているようです。今後の両者の話し合いの中でも恐らくこのような研究結果が重要視されてくるでしょう。コン